MARUZEN
ISSN 1883-5759
丸善ライブラリーニュース　第14号（通号165号）2011年9月20日
発行／丸善株式会社　発行人　土方裕之

# LIBRARY NEWS

第14号

## 駿河湾を望む 中規模総合国立大学の挑戦

静岡大学附属図書館長　加藤 憲二

本日は、お時間いただきありがとうございます。

**加藤**　私共のような中規模の地方大学に着目していただきありがとうございます。

図書館としては電子ジャーナルが象徴的ですが、法人化後の厳しい環境にあって一番厳しいのが、中規模の総合国立大学ではないでしょうか。静岡という街が新商品のマーケティングによく使われると聞いたことがあります。静岡大学も、地理的な意味以外でも日本の国立大学法人の真ん中当りに位置する大学だと考えられます。だとすれば日本のボディをどう作っていくか、日本の高等教育をどうしていくかのモデルになると考えられなくもないですね。

静岡大学は、研究大学に残れるかどうかの分かれ目あたり。いわゆる文理科大学で、その中で工学部の占める位置がとても大きい。昭和の時代を象徴しているといえるかもしれません。

図書館長になって、大学をとりまく環境の厳しさを実感してきましたが「やれることはある」と言うのが私の信念です。

学長は、修士課程に軸をおいて頑張っていこうとされている。私も賛成ですが、簡単なことではないですね。

大学図書館については如何でしょう。

**加藤**　今年、リニューアルして入館者数は3割増えました。不思議なことにリニューアルしてラーニング・コモンズ等作りますと利用者は3割増えるようです。3割の法則でしょうか。

リニューアルして二つ素晴らしいことがありました。図書館で皆がワイワイしている中で、勝手にゼミをしてくれる先生が何人もでてきているんです。僕が一番期待していたことです。今FDだとか、評価がさかんに求められていますが、オープンにするとそんなこと要らなくなると思いますね。横で自主学習している学生も平気です。いいかたちが出来つつあります。特に若い大学教育センター、かつての教養部に相当するような分野を担っている先生方がやってくれて、就活・キャリアに関わる講義をここでやったり、全学講義も芽生えつつあります。

もう一つは、モニターを各学部から毎年希望者10人位集めるんですが、今年はなんと希望者40名。「図書館で何かしたい」という学生たちです。本当に嬉しかった。

今回の改修は独自予算を組んで自前でやりましたが、その40人のモニターへの応募もうれしい成果です。

学生は、自分たちの居場所を見つけた、見つけるということが上手くて頼もしいですね。

**加藤**　浜松館も概算要求を出しているので、通ったら、「真ん中に透明の丸い部屋

を造る」っていうアイデアがあります。モニターの活動の拠点計画です。学生が大学のために動くことで、まわりが気になって、「何してるんだ?」もうそれで充分です。

図書館の機能っていくつかあるんですが、「講義室と保健センターの中間の役割がある」と私は考えています。大学に来て、講義だけ出て、何も話すことなく帰っていく人達、ちょっと調子が悪くなると、心の相談室に行かなきゃいけない。そうじゃなく、図書館っていうのは、絶対的にヤスラギの空間、人と人とが静かに出会う空間でしょう。

学校にはいくら言ったって堅苦しいところ、競争社会であるという側面がある中で、寛げるのは部室と保健室と図書館くらい?!この機能は絶対低く見積もっちゃいかんのです。機能は定量化できません、数値化ができない。でも、ここがあるために、ここがあることで救われている学生が、学生だけでなく教師も沢山いますヨって評議会で言ったりするんです。そうすると皆さん黙ってお聞きになっています。

**学年の違う者どうしの接点が少なくなってます。**

**加藤**　それもあるんです。講義もゼミも目的がある空間で、サークル位しかそういう場はなくなったのではないでしょうか。

私が世界と付き合うのは研究を通してなんですけれども、日本の若者をみても基礎的な力は全然劣ってないんです。しかし、気になるのが会話能力。英語力もあるけれど、会話そのものを進める力が弱いのではないか、と。自分の中で整理する力がすでに弱いんですネ。そういうところに学習がシフトして行かなくちゃいけない。単位の計算に90分の授業をしたら、予習を90分、復習を90分と言いますが、図書館でダベリなさい。僕はまずそれだけでもいいと思う。授業の内容に触れてくれたら。そういう機能が、このクラスの大学には非常に求められていると思いますネ。上手く行ったら、学生は化ける。モニターが40人とか、勝手にゼミを開いてくれる事例を見ていると、化けてくれるだろうという期待は強いです。楽しみです。

ハーベスト・ルームでのディスカッション風景

**先生ご自身の研究史・個人史を、お聞かせください。**

**加藤**　大阪で生まれ、育ちました。高校では、山岳部でキャプテンまでやって、受験勉強は、大学紛争の時代でもありあまり身が入らなかった。学部は二期校の信州大学に行きました。

小さな大学ですから、先生があんまりいない。山に行くには植物学が良いんですが、植物名を覚えられない。顕微鏡の下なら何とかなる!それで水の中のプランクトンの研究を始めたんです。

名古屋大の院に行って今のこの分野（水圏の微生物生態学）に取り組み始めました。あの時代の大学の教授は本当に良かったですね。「植物プランクトンによる生産の研究が一段落したので、君は〝分解〟をやりなさい。」、ってこれだけです。

先生がいないと言うのは、自分がそれなりになったら、上に被さるものが何もない。これは儲けたと後で気がつきました。今、日本では地球環境微生物学と名乗っている教授は、おそらく私だけじゃないでしょうか。世界では、何十人か居て、一つのトレンドになりつつありますが。

**学術雑誌の編集長をされてらっしゃいます。**

**加藤**　今は Geomicrobiology Journal の編集ですが、以前日本微生物生態学会が中心となって発行する Microbes & Environments の編集長をしました。和英混交の小さな雑誌が英文誌になり、今は、完璧なオープンアクセスジャーナルです。英文誌にしたとき、海外の二社から買い取りの話がありましたが、お断りしました。将来的に得だとは判断しませんでした。分野が若く元気が良かったことと、私のように既成の大きな学部・講座の人っていうよりも、自由な立場の人達が多かったのでしょうか。いくつかの条件が重なって、会員も千人程度の学会で、投稿料もフリーで、ペーパーも出ていて、年会費が1万位でやれています。一論文1000ドル台ですね。著者選択のオープンアクセスの権利が一論文3000ドルなんて少し高すぎますね。健全な運営をしていたらできますよ。

**学術情報流通の書き手・読み手である研究者からみて、現状はどの様に**

**加藤**　学術コミュニティが健全に運営されているのでしたら、特に電子ジャーナルが問題になるわけではない。学会・組織は常にオープンであれば、品質保証は「健全さの問題」なんです。健全であれば、中身は自分の研究との関係であって、インパクト・ファクターは、問題ではない。健全な学術コミュニティが、中身は保証できます。

それにはコミュニティは閉じちゃいけない、オープンにすることが大切です。投稿料も取らないというのは、大事なことだったと思います。やれないかとも思いましたが、やれましたネ。健全さは、ある程度以上の支える数がいて切磋琢磨、学問的議論、基本的なモラルがあれば当然できるものだと思います。

大学院を終えてドイツのコンスタンツ大学に留学しているときにエルスターという名誉教授が、編集者としてある雑誌を発行していました。腑に落ちない論文

静岡館ギャラリー

が掲載されたので「先生、あの論文は」とお話ししたら、「評価は読んだ人間がするんだ」と言われました。味わい深いことばです。

**学会にも栄枯盛衰、ライフサイクルはあるのでしょうか？**

**加藤**　私の関わっている分野は、伸び盛りで、今も伸びています、世界中で。ネイチャーグループから新しい雑誌も出ました。しかし、雑誌もやはり寿命があって、要らなくなったら閉じなきゃいけない。あるいは組み合せを変えて健全さを維持できる運営が必要になりますね。

**研究者の社会的役割について**

**加藤**　今、我々研究者は、悪く言えば職人、技術者的になってしまっていて、社会の中でこれをさせてもらっているということを、あまり自覚していないのではないかな。自覚の問題が根底にあるように思います。そういう自覚が我々の中で少なくなってきているのと、忙しくなりすぎているということがありそうです。

**これからの研究者育成にについて、問題・課題がありましたら。**

**加藤**　評価が一番大事なのは、採用とプロモーションでしょう。論文はピュア・レビューで評価されるんですが、スタッフが評価したら、見たら判ります。

しかし引用されやすい論文は、我々の分野では方法に関する論文で当然引用度が高くなる。そちらへそちらへと流れていくという指摘が、アメリカで20年ほど前にありました。日本でもそういう傾向がなくはない。方法が優先し本来の目的がその分小さくなってしまっている事が、理科離れにつながってないかという危惧があります。我々が真摯に〝問い〟に向かっているんだということの意味を伝えることが必要だと思います。

**理科離れはに対する活動も盛んなようですが？**

**加藤**　私も明日明後日、高校生と一緒に富士山の地下水を見に行くんです。研究室でやっていることのほんのゴク一部分を高校二年生達に見てもらうんだけれど、やはり本物を見せるということが基本だと話しています。

**次に、学術流通で電子ジャーナルの、プラス・マイナス両面についてお聞かせください。**

**加藤**　プラス面は大きいですね。研究者にとって電子ジャーナルは必須のツールです。本来なら平等化を促す、国籍・国境をなくすツールだったはずです。学術の全体が見えるということは凄い進歩です。自分の関係する分野の雑誌がどれ位あるかなんていうのは、紙の時代にはあまり考えませんでした。全体が見えて、自分の立ち位置が判るとか、一緒のこと・同じ事を考えている人がこんなにいるのかということが、間違いなく電子ジャーナルの検索で容易に明らかになります。

自分が、引用した論文がサァーっと出てきて、自分の論文を引用してくれている論文もすぐ分かるのは、これは素晴らしい。新しい学術コミュニティが生まれてくる可能性がありますね。

しかし海外の大手出版社が発行する電子ジャーナルの価格上昇は尋常ではない。特にパッケージにして丸ごと買い揃えるのは安心感もありますが、必要のない、紙なら淘汰されてもよいジャーナルもいっしょに買っていて、改めねばならないところへきていると思います。今のままでは、情報が多すぎて使いこなせない。関連情報と引用度だけで文献を拾うというのは違っていて、もう少しコンピュータに賢くなってもらって、本当に我々が考えたいことと上手く何処かで火花が散るような、そういうソフトが出てきたらそれは素晴らしい。様々な意味で電子ジャーナルを越えた次のステップが求められているのではないでしょうか。

**電子ジャーナル以前・現在・将来は、**

**加藤**　ドイツに留学したときに、コピーを取っていたら、「そんなに読むのか」と言われて、眼が覚めたことがありました。

今は、学部生でも私と同じレベルのサーチが出来てしまいます。昔だったら我々のほうが情報収集能力がはるかに高かったんですが、今はそんなことない。学術への敷居が低くなったのはメリットです。ただ困るのは選択の段階で、皆んな止まっちゃうんです。学習・教育を積むことがやはり大切になるんでしょうね。

**今後の電子ジャーナルについて**

**加藤**　研究機材・機器に比べて、高いコストではないので、私はこれ以上購入を減らすということは、得にならないと考えていますが〝選択〟は必要でしょう。

今後は人文社会系の人達が、電子ジャーナルを上手く活用してくるフェーズが来ないと、真の電子ジャーナル時代にはならないと思います。今はデータとしての価値でしょうか。我々自身が、思考プロセスのツールとして活用する段階を期待します。OPACとの連携も重要で、使いやすい仕組みを作って欲しいと要望しています。

オープンアクセス（＝納税者への公開）という意味では日本で先行している機関リポジトリが有効だと思います。静岡大学の機関リポジトリは、論文以外に、注や正誤表、説明等のテキストを後付で書き込みができます。コメント・ノートを入れることもできます。より理解いただけるよう、執筆後でも対応いただいています。機関として、著者として責任をもって維持していくために、これを加えています。教員の60％がリポジトリに参加しています。数は５０００タイトルですが、割と良い論文を提供いただいているのではないかと考えています。一度ごらんになってみて下さい。

（2011.7.29）

今年８月にリニューアルオープンした浜松館